

論文審査の結果の要旨および担当者	
学位申請者	川上 りか
論文担当者	主査 石原 正治
	副査 宮本 裕治
	副査 若林 一郎
学位論文名	Initial pathological responses of second-generation everolimus-eluting stents implantation in Japanese coronary arteries: Comparison with first-generation sirolimus-eluting stents (日本人の冠動脈における第2世代エベロリムス溶出ステント留置に対する初期の病理学的変化 -第1世代シロリムス溶出ステントとの比較-)
論文審査の結果の要旨	
<p>虚血性心疾患は年々増加し、その治療として薬剤溶出性ステント (Drug-eluting stent: DES) を含むステント留置が経皮的冠動脈形成術として広く行われている。ステント間での臨床的有用性や安全性に差異があり、第1世代薬剤溶出ステント (first generation drug-eluting stent: 1<sup>st</sup> DES) に比較して、第2世代 DES (2<sup>nd</sup> DES) の臨床的有用性と安全性は確立されている。しかし、ヒト冠動脈、特に日本人の冠動脈における 2<sup>nd</sup> DES 留置後の病理学的所見は十分に明らかになっていないことから、申請者らは日本人の冠動脈における 2<sup>nd</sup> DES 留置後の病理学的組織反応について研究を行った。兵庫医科大学、国立循環器病研究センター、大阪警察病院の剖検症例より得られた、2<sup>nd</sup> DES 留置後 6 症例 12 病変と 1<sup>st</sup> DES 留置後 8 症例 14 病変の冠動脈について、樹脂包埋による切片を作製し比較検討した。新生内膜によるステントストラットの被覆率を求め、画像解析ソフトを用いて、新生内膜の厚さ、ストラット周囲のフィブリンの面積を定量した。ステントストラット周囲の炎症細胞浸潤の程度について半定量を行った。その結果、2<sup>nd</sup> DES ではストラットの新生内膜による被覆率が有意に高く (<math>p &lt; 0.05</math>)、内膜の厚さが厚く (<math>p &lt; 0.05</math>)、炎症の程度が軽度で (<math>p &lt; 0.05</math>)、ストラット周囲のフィブリンの析出が少なかった (<math>p &lt; 0.05</math>)。</p> <p>以上より、2<sup>nd</sup> DES 留置後の冠動脈は 1<sup>st</sup> DES 留置後の冠動脈よりも組織修復が進んでいるものと評価された。組織反応の相違は 2<sup>nd</sup> DES の臨床的有用性を反映していると考えられた。この結果は、日本人における DES 留置後冠動脈に関して重要な知見を与えるものと判断され、学位に値するものと判断された。</p>	